郡市医師会長プロフィール

胆振西部医師会

守谷 保夫 先生

伊達亘理藩の御殿医を祖父に持ち、父君も産婦人科医として活躍されるとともに当医師会長を歴任された該博をもって知られた方で、その遺志を継ぐように伊達市に内科医院を開業されて18年、篤実な診療風景はつとに評判で、簡にして要を得て飾らない治療実践はすでにして達意です。昨春国立札幌病院から俊秀仲野龍巳先生を副院長に迎え、先生の悲願であった地域医療のフロントラインでの真に実効ある貢献へ大きくまた一歩前進されています。日々患者のニーズを肌で感じ、真摯に医師たる者の役目を果たしておられる先生がこのたび会長に就任されたことはまさに時代の要請といえましょう。

「各会員が力を合わせ、地域医療の充実を図る。開業医と総合病院のネットワークづくりを進め、迅速かつ的確な医療活動を展開していきたい」とあるべき医療の姿と方向をしっかりと見据えて、力強く抱負を述べておられます。伊達市教育委員などの公務多忙に加えての大役、一層繁忙を極めること必定です。御身を大切にしていただきたい。

札医大23期のご卒業で、小生も同期ですが、先生ほど仲間から愛された人を他に知りません。雅量は天性にして、赤心を推して人の腹中に置くといったお人柄です。ですから側にいてまったく疲れません。明るい伊達市を象徴しているような方です。とは言え課題、難問山積みです。移住先として注目されている当地ですがまず求められるのが医療への安全保障感です。会長、頑張ってください。お供します。

札医大51年卒。同第一内科同門。医学博士。二男一女の佳き父。ゴルフはSヤードの遣い手。

（北海道医報通信員　荻野秀二）

遠軽医師会

田中　実 先生

本年4月16日遠軽医師会定時総会において、満場一致で田中実先生の医師会長就任が決まった。

遠軽医師会は例の医師名義貸し問題で揺すぶられ、小生（梅田弘敏）が医師会長を辞任して以来、水元遠軽厚生病院院長に会長職を引き受けていただいていたが、、水元先生の定年退職に伴い田中先生が泣き落とされて会長を引き受けさせられたというのが真相だ。

田中先生は地元遠軽高校の出身で、昭和59年札幌医科大学卒業と同時に同大麻酔科入局。麻酔科標榜医の資格を得た後、市立釧路総合病院麻酔科・市立旭川病院麻酔科勤務を経て、昭和61年札幌医大第一外科教室に入局。昭和62年道立紋別病院勤務の後、平成4年旧菊地記念病院に外科医長として赴任、平成15年9月まで消化器病学会専門医として内視鏡による診断・治療を精力的に行い地域住民の信頼を集めてきた。平成15年10月旧菊地記念病院を引き継ぎ遠軽共立病院を開設、現在に至っている。

先生は医師会理事の経験も無しに突然会長に祭り上げられ、大いに困惑したものと推察されるが、持ち前の陽気さと野球で鍛えた馬力を武器に、ご難続きの遠軽医師会を変革リードしてくれるものと期待している。趣味のゴルフの腕前はシングル級で、余裕が出てきた頃にでもまた医師会の親睦ゴルフ大会を再開してくれたら嬉しい。

（遠軽医師会理事　梅田弘敏）

赤平市医師会

赤川 清介 先生

平成17年5月9日の定期総会で杉本良一会長の後任に赤川清介先生が満場一致で8代目赤平市医師会長に選出された。先生は昭和16年利尻生れ。稚内高校出身。昭和41年札幌医科大学医学部を卒業後札幌医大病院でインターンを終了。昭和42年同大学脳神経外科学教室に入局、初代故橋場輝芳教授に師事。その後札幌医大病院、中村脳神経外科病院、市立釧路総合病院、帯広協会病院等に勤務し、脳神経外科医一筋にスペシャリストとしての道を歩んでいたが、昭和61年2月になり、赤平市で開業していた岳父佐藤譲先生の外科医院を継承することになり赤平市に移住した。それまでは医師会活動にはほとんど関心を持つことはなかったので、何も分からないまま同年赤平市医師会に入会した。性格的には元来人の先頭に立って歩くことが少なく、人と争うこともなく、人の尻についてのこのこ行くのが好きなタイプであった。

医師会に入会して何か期する所があったのか、それまでの性格が変わったように会の先頭に立って花の総務を担当したり、開業医会長、三師会副会長、国保運営協議会委員、介護保険認定審査委員等を経験し、北海道医師会関係では医政研究委員会委員、医業経営対策委員会委員、産業医部会委員、医師国保組合会組合員を勤め、また、警察医としても活躍している。医師会活動をいろいろ経験し、実績を積んだことが会員に認められ赤平市医師会長に推挙された。

札幌医大野球部に所属し、エースとして大いに活躍し札幌医大に赤川投手ありと道内ばかりでなく東医体でも有名であった。今も赤平ロータリークラブで監督兼投手として甲子園で投げている。これからは赤平市医師会長として活躍することを期待している。

（北海道医報通信員　中橋　勝）

深川医師会

伊藤　崇 先生

私が深川医師会に所属してから40年近くになるが、この40年間、わが医師会は一言で表現すれば眠りほうけていた。40年にわたっての制度疲労は次第に進行し、活力の低下、人事の停滞、志気の衰えも著しく、求心力や地域社会での存在感は見る影もなく低落した。定款はあるにはあったが欠陥だらけで、役員選出に係る選挙規則もない。また、かりにそれらが完備されていたとしても、最近流行の用語でいえばコンプライアンスの励行などという考えは皆無であって、一部会員の医師としての、また社会人としての良識やモラルの低下も散見されるようになってきた。

このような失墜を食い止めようと、深川医師会所属の良識ある会員が結束し、ようやく本年3月の役員改選で、かねて期待されていた伊藤崇会員を新会長に選出することができたのである。

私と伊藤新会長とは長らく同じ医師会に所属してきたが、従来むしろやや疎遠の仲であった。しかし、ある機会に深く知り合ってみると、小児科医としての実力実績はいうまでもなく、その識見や先見性、行動力、倫理性において極めてすぐれたものがあり、さらには友人として十全の信を置くに足りる、純粋なまた親しむべき人物であることがようやく理解できるようになった。以って自らの不明を恥じるのみであるが、副会長として私は全面的に伊藤新会長を補佐し、深川医師会の諸改革を強力に推進しなければいけないと一層の決意を固めたところである。

以下は私の個人的な感慨であるが、もはや人生の秋というべきこの年齢において一人の良き友人を得たことは私にとって望外の喜びである、ということを最後に一言付け加えて擱筆しようと思う。

（北海道医報通信員　吉本　勲）

美唄市医師会

吉村 誠治 先生

美唄市医師会は、本年発足50周年の記念の年を迎えました。しかし今、美唄市の地域医療は大きな試練に直面しています。先輩方の努力で、労災・市立の両病院を中心に円滑な病診連携がとられてきましたが、労災病院の再編問題に加え、ベテラン勤務医の開業等での転出や、医師卒後研修制度などの影響で両病院への医師派遣抑制や引き揚げが相次ぎ、診療科の休診や縮小を余儀なくされている事態になっています。この難局の節目の年に、吉村誠治先生が当会会長に就任されることとなったのは、まさに巡り合わせの妙と思われます。

先生は3歳の頃から美唄で育ち、北大医学部に進学、卒業（北大28期）後放射線科医として研鑽を積まれ、昭和39年に美唄労災病院放射線科部長として、故郷美唄に帰られました。その後、労災リハビリセンター・しろした病院を経て現在は老健施設コミュニティーホーム美唄施設長に就いておられます。この間40年余にわたり当市の地域医療に尽力され、当会の理事・副会長・参与を歴任されました。一方地域ではロータリークラブ会長やゴルフ協会会長にも就かれておられます。まさに美唄市の地域と医療の変遷を熟知しておられるのです。

今春美唄市は、新たな中核病院創設を中心とした地域医療ビジョンを発表しました。当医師会も全面的に協力し、市民が安心できる地域医療を確立しなければなりません。

先生には御高齢ではありますが、趣味のゴルフで年間50回以上もコースに出られるその体力と気力で長年の経験をいかし、当会の運営、御指導にあたっていただけると確信し、御期待申し上げます。

（北海道医報通信員　志智重之）

上川北部医師会

吉田　肇 先生

平成17年4月25日開催の上川北部医師会総会において、会長職が、7期14年務められた中村稔先生から、吉田肇先生に継承されました。

先生は、昭和20年5月5日生れ。昭和52年東京医科歯科大学院卒業。同大学医学部付属病院難治疾患研究所、昭和53年国立がんセンター頭頸科で研鑽を積まれ、昭和55年旭川医科大学耳鼻咽喉科教室に入局。昭和55年7月、父、故吉田良収先生の逝去により、吉田病院院長に就任。専門の耳鼻咽喉科に加え、内科、口腔外科・歯科を併設し、平成7年医療法人臨生会理事長、院長として、名寄市ばかりでなく、稚内市、士別市に分院を拡大。まさに、地域医療のリーダーとして精力的に活躍されています。平成6年9月には、「北海道医師会医学研究奨励賞」および「北海道知事賞」を、声紋分析による咽喉頭癌の早期発見、臨床と疫学的解析により受賞されました。

一方、名寄地方スキー連盟会長、北海道スキー連盟副会長として、スキーの普及に努力。全道、全国大会はもちろん、ワールドカップ複合大会の開催など、スキー領域の重鎮でもあります。

ゴルフはハンディ10。温厚で感情の起伏を表に出さないプレイぶりは多くの友人から歓迎され「肇先生」と慕われている様子（ニギリでも）。さらに、公職として、名寄市観光協会会長、名寄市体育協会会長、名寄ロータリークラブ会長、日本ボーイスカウト北海道連盟名寄第一団長、上川北部医師会附属准看護学院院長など枚挙にいとまがありません。また、名寄東病院の医師会委託運営には腐心されているようで、どこまで頑張ってしまうのか心配でもあります。家庭面では、結婚16年目に授かった「臨」(のぞむ)君の存在がすべての支えとなっているようで、我々のリーダーとして今後ますます活躍されるものと確信しています。

（北海道医報通信員　岡崎　望）

帯広市医師会

吉田 征夫 先生

森末克彦前会長に代わって、今年から帯広市医師会長に就任された吉田征夫先生を紹介いたします。先生は昭和18年12月20日、中川郡幕別町（帯広市のすぐ隣町です）で生をうけています。北海道社会事業協会帯広病院、小樽市立病院などの小児科勤務の後、昭和54年9月に帯広市内で小児科医院を開業。平成元年から帯広市医師会理事に就任し、総務部長を長く勤められた後、平成15年より副会長となり、森末先生を補佐されていました。その仕事振りは、綿密に情報を収集し、行政のお役人とも面識が広く、バランス感覚がよく、決して極端な結論を導かず、多くの会員を説得する力を持っています。決して命令だけして動かないのではなく、自らアクティブに活動されるタイプです。私は下戸なのでよく分かりませんが、お酒はかなりのものらしく、夜の街でも大層な権勢を誇っているとか。ゴルフも昔はHD10まで上達し、かなり鼻息が荒かったのですが、途中から奥様に合わせてパークゴルフに転向され、会長になってから対外的なこともあり、再開されたようですが、100叩きのようです。何事にも一所懸命な先生ですが、一番熱中しているのは、政治的活動かもしれません。私のような政治音痴の者には想像もつかないような話をたくさん蓄積しているようです。政治は、人の心を正確に読み、動かすことができなければ成り立たない技ではありましょう。先生の人の心を逸らさない、相手の立場に立った対話の仕方は、そのような活動から培われてきたものと推察しています。

医師会活動は、政府の医療費抑制政策、医療の高度化、個人情報保護、会員の医師会離れの傾向など、難しい局面にありますが、吉田征夫会長の行動力で、正面突破して行けると確信しています。

（北海道医報通信員　村越敏雄）

お知らせ

電子メールによる会員への情報提供について
－メールアドレスの登録－

◇情報広報部◇

本会では、インターネットを利用し、電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会のダイアルアップ接続登録者（hokkaido.med.or.jp）全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

なお、今回、他プロバイダの電子メールアドレスをご登録になられる会員には、もし、できれば本会のメールアドレス（hokkaido.med.or.jp）を取得（無料・インターネット接続サービス申込み）されるようお願い申し上げます。

●電子メールアドレスの登録方法

電子メールで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：
add@office.hokkaido.med.or.jp